

確認した植物は以下の通りである。

アオキ	カントウマユミ	タラノキ	マメガキ
アオナラガシワ	(ユモトマユミ)	ツルニンジン	ミズキ
アマチャヅル	キハダ (百年もの)	ツルマメ	ミズバショウ
アブラチャン	キブシ	トチノキ	ミツデカエデ
イタヤカエデ	クサギ		ミツバアケビ
イヌザンショウ	クマザサ	ナラガシワ	ミツバウツギ
イヌツゲ	ケヤキ	ナワシロイチゴ	ミヤマハハソムカゴ
イロハモミジ	コクサギ	ニワトコ	イラクサ
ウド	コブシ (樹齢約百年)	ノブキ	ムラサキシキブ
ウバユリ			モミ ※切株の年輪
ウマノミツバ	サイハイラン	ハクウンボク	を測定 (170年)
ウメモドキ♀	サワギク	ハリギリ	モミジイチゴ
ウルシ	サワラ ※切株で樹	ハルニレ	
ウワバミソウ	齢を測定 (170年)	ハンショウヅル	ヤマガシユウ
エゾエノキ	サンショウ	ヒノキ ※樹齢 300	ヤマブキ
エゴノキ	スギ	年、樹高 45 mのもの	ヨウシュヤマゴボウ
エンレイソウ	スグリ	があった。	ルイヨウボタン
	セントウソウ	フタバアオイ	
カツラ	ソヨゴ	ヘビノネゴザ	
カヤ		ホウチャクソウ	

〔考察〕

- 人々が多く入る神社境内であるのかかわらず、植生が大変豊かであることが今回の調査でわかった。ハルニレやサイハイランなど、このような場所ではあまり見られない種類もいくつかあった。
- 樹木が守られているためか樹齢何百年レベルの大きな木が数多くあった。そのスケールは、他と比較にならないほどである。
- 植生の豊かさを守るため、この環境を今後も維持していかなければならない。

(西村 新介)

7-2 経ヶ岳自然植物園の野草

〔はじめに〕

経ヶ岳自然園は、入り口草原広場（標高約 1050 m）、山頂シバ草原（標高約 1150 m）、その間の森林の下の草地の3地帯に多くの野草が生育している。

昭和 26 年に伊那市によって設置されたものだが、それ以前は農耕馬のための草刈り場として西箕輪の人々にとって大切な草原であった。しかし、時代が進み農耕馬から農業機械に換わると、この草刈り場も放置された。それを、樹木や野草および野鳥や昆虫を観察するために、市が借り受け整備を続けている。今は、市の観光課が地域に委託し、年に2～3回草刈りや倒木の撤去等の管理が行われている。観察会も行われており、5月の第4日曜日のハイキングのコースとして、また1月終わりには冬の自然観察会が行われている。権兵衛トンネルが開通し、権兵衛峠を越える国道 361 号線の通行は近年ほとんどなくなった。従って、経ヶ岳自然園を訪れる一般客はほとんどいない。

しかし、野草たちは毎年相変わらず、土から芽を出し、茎を伸ばし葉を茂らせて、花をつけ実を作り、次の年に向けて子孫を残すという営みを続けている。それを眺める人が少なく残念だが、私は近所の学校にいるという縁により、少しでもそのけなげな姿にふれていきたいという思いから、当自然園の観察を始めて2年目となった。何とか時間を見つけて観察したいと思っているのだが、正直言ってなかなか思うように進まない状況だった。その中で、月に1回はここを訪れ、花を咲かせている植物たちを確認した。特に珍しいという植物は見られなかったが、上伊那の一地域で、ひっそりとではあるが可憐に生活する植物たちを紹介してみたいと思う。

〔四季折々に花咲かせる植物たち〕

1 4月の様子（30日）

周囲の広葉樹が芽吹きを始めている。入り口草原広場は、フデリンドウが花を咲かせていた。その他、ニオイタチツボスミレの紫の花、ミツバツチグリの黄色い花が咲いているくらいで、あとは小さな芽や葉ばかりであった。

2 自然園の樹木（5/7 参考調査）

樹木に詳しい小野章先生（動物班）を誘って、樹木の同定を行った。周囲はツツジが多かった。

コデマリ（ばら科：別名スズカケ）

庭木や生け花用として一般的な落葉低木である。枝の先は弓状に曲がり、その上に繖状の花が並ぶ。別名スズカケは、花序が並ぶのが鈴をかけたようであることによる。

ナツハゼ（つつじ科）

日当たりの良い山地に生える落葉低木。花は初夏、果実は秋に熟し、味は酸っぱい。

シロモジ（くすのき科：別名アカジシャ）

落葉低木。花は春、葉より先に地味な散状花序をつける。果実は、かつては中の核を搾って燈油にしたらしい。

コブシ（もくれん科：別名ヤマアララギ、コブシハジカミ）

春先のおなじみの木だが、つぼみの形が拳のようだというのでこの名が付けられた。花には香気がある。

アセビ（つつじ科：別名アシビ、アセボ）

観賞用に栽植される常緑低木。花は春。葉は有毒（アセボトキン）で、駆虫剤に用いる。馬が食べると、苦しむので馬酔木という。

コナラ（ぶな科：ハウソ、ナラ「檜」）

ドングリの木として各地の山野に見られる。高さは17m、直径は60cmになる。材は、建築、器具、薪炭などに用いる。

ナツグミ（ぐみ科）

花は晩春。果実は柄が長く垂れ下がり、大変おいしい果実である。

コバノガマズミ（すいかずら科）

日当たりの良い山野に生える落葉低木。花は夏、白い散房花序をつける。葉のがそろっていて、葉脈も整っている。

ウリカエデ（かえで科：別名メウリノキ）

落葉小高木。花は晩春、若葉と同時に枝の先につく。秋に黄葉する。木の皮が瓜の色に似ていることからこの名が付いた。材は玩具や箸に用いる。

ナガバモミジイチゴ（ばら科）

モミジイチゴ（木イチゴ）より葉が狭く卵形である。花は晩春、枝先に下向きに白く咲く。果実は美味。

ヤマザクラ（ばら科）

若葉は赤褐色だが、やがて緑色に変わる。花は葉と同時に開き、芳香がある。材は家具、楽器、木版、合板などに用いる。

ナナカマド（ばら科）

花は初夏、小さい白い花が固まりとなって咲く。葉は晩秋に紅葉する。七度かまどに入れても燃え残ることからこの名が付いた。

ゴヨウアケビ（あけび科）

アケビとミツバアケビの天然雑種。花は春、赤紫の総状花序が垂れ下がる。

カスミザクラ（ばら科：別名ケヤマザクラ）

高木で、花は4月。花の色が白いので、満開の時には山に霞がかかったように見えることからこの名が付いている。葉は縁に重鋸歯がある。

リョウブ（りょうぶ科）

落葉小高木。幹は茶褐色でなめらか。花は夏、枝先に数本の総状花序が多数付き小さく白い。幼芽は食用、材は床柱、薪炭に良い。

3 晩春の様子（6月1日）

アヤメの花が満開だった。ワレモコウも楕円の葉を茂らせていた。小学校の頃、7回叩くといいにおいがすると言って、遊んだのを思い出した。

アマドコロの花も全盛で、50株ほどの茎が弓状に曲がり、花が下向きに咲いていた。ノアザミ（きく科）はまだつぼみだった。

ウツボグサ（しそ科：別名カコソウ）も花を咲かせようとしていた。タムラソウが葉を広げ秋の開花に備えていた。

キンポウゲ、ツメクサ等の一般的な野草が、全盛であった。

山頂草原（展望台）に行くと、チゴユリ（ゆり科）の花がたくさんあり、全盛だった。白くて小さいかわいい花である。

ササバギンラン（らん科）も2株あり美しかった。

4 初夏の様子（7月6日）

オカトラノオが全盛だった。花は総状花序で先の方が曲がり、その形が虎の尾に似ていることからこの名前が付いている。元の方から徐々に花が咲く美しい花である。ノアザミ、ウツボグサも盛りだった。

5 夏の様子（8月22日）

身体の大きいシラヤマギクが群生していた。シラネセンキュウ、アカショウマ、ツリガネニンジンも盛りを迎えている。入り口草原広場上部に、タチフウロ、キキョウの薄紫・紫の花が点在していた。キンミズヒキの花が咲き始めた。

山頂草原では、ヨツバヒヨドリ、ミツバサワヒヨドリが全盛を迎えていた。ママコナ（しそ科）のピンクの花がたくさん見られた。マツムシソウ、オミナエシ、オオアブラススキなどの秋の花が咲き始めた。

6 初秋の様子（9月12日）

シラヤマギクが相変わらず盛りだった。それに似たシロヨメナもたくさんあった。

タムラソウ（きく科）が紫の美しい花を咲かせていた。草丈は1mほどあり、葉や花はノアザミに似ているが、花の根元の方がポコッと丸くなっているのが特徴である。名前の似ているアキノタムラソウ（しそ科）とは全く違う植物である。

秋の七草の一つオミナエシ（おみなえし科）が、黄色い花を咲かせていた。上部で黄色い花が粟飯のように咲くところから、粟花ともいう。漢字では「女郎花」と書く。花が小さく、近くでよく見ると距がある。

アキノキリンソウ（きく科：別名アワダチソウ）も黄色いたくさんの花を咲かせていた。また、ワレモコウの赤い実がきれいだった。

山頂に登る途中の木陰には、コウシンヤマハッカが咲いていた。コヤマハッカに似ているが、甲州と信州の両方に分布するので「甲信ヤマハッカ」という名が付いた。上伊那の山地では一般的な野草である。

展望台では、マツムシソウ（まつむしそう科）がたくさん咲いていた。守屋山山頂のような高原に生える。頭花は小さい丸いつぼみが山状にたくさん並び、周辺に舌状で端が裂けた薄紫の花びらが開いている。まつむしが鳴く頃開花することからこの名が付いている。

ススキと一緒にミヤマノアブラススキも焦げ茶色の穂をつけていた。

7 秋の終わり（10月30日）

日が短くなり、周囲は紅葉し美しい秋の情景となった。

リンドウの紫の花が満開であった。ナツグミの実が残っていたので食べた。シャゴメを甘くしたような甘酸っぱい渋みのある味で、おいしくて夢中になって食べた。

樹木は紅葉していた。オオモミジ、ハウチワカエデ、ヤマウルシなどの赤、コバノガマズミの黄など色とりどりで美しかった。

山頂では、マツムシソウの種ができていて、次の代の準備が整っていた。

【おわりに】

- 2年間調査をしてきて当自然園の植生は、経が岳山麓一帯の植物を代表するものが豊富であり、過去の状態を結構残しているように思われる。これは、前述したように草刈りや倒木の撤去等管理が適切に行われている成果だと思われる。植生の状態を今のまま維持するために、今後も市による管理を継続して欲しい。
- しかし反面、区民中心の観察会が春冬2回行われているだけで、あとは植物たちは人目に触れない状態にある。植物に興味をもつ人、花を写真に納めたいという人が多くこの地を訪れてほしいと思う。そのためには、みはらしファームと合わせ、市の観光スポットとしてPRし、人々に広めていくことが必要かもしれない。四季折々の植物に関心を 持つ方々が増えてくれるように願っている。

（西村 新介）

7-3 上伊那南部地区（飯島町）の失われた？ 植物

オキナグサ

子どもの頃に父をはじめ大人から聞いた話では、かつては飯島町の田の土手などにもオキナグサが自生していたと聞いたことがある。オキナグサのことを「チオンバ」と呼んでいたようである。

ミヤマツチトリモチ

資料によると、飯島町にミヤマツチトリモチがあったという記録がある。ミヤマツチトリモチは標高 1,000m~1,500mの深山のカエデ科やイヌシデなどの根に寄生する多年生の植物で長野県では須坂市に自生地が見つかるが準絶滅危惧種とされている。幾度か探してみたが、その後確認できていない。

シナノショウキラン

かつて郷土館専門委員会の植物班で調査を行ったときに、飯島町で当時キバナショウキランとしたが、その後、2001年に信大理学部の井上健教授が新種として命名したシナノショウキランではないかと思われる。いずれにしても、その後自生が確認できていない。

ツメレンゲ

駒ヶ根市中沢の山中でツメレンゲを見たことがある。ツメレンゲは長野県から九州にかけて、乾燥した岩場などに自生する多肉植物で、河原の堤防や石垣、屋根などにも生える。長野県レッドリストの準絶滅危惧種である。

オニク

越百山への登山道や戸倉山でオニクを見かけた。オニクは、本州中部以北から北海道の高山に自生する全寄生の葉緑素のない1年草で、漢方で強壯薬として知られている。近年確認できていない。

イワカガミ

飯島町の里山（標高 800m）の林道脇にはかつて、イワカガミが咲いていた。今では、標高の低いところに見られることはなくなってしまった。50年も昔のことである。

カタクリ

また、飯島町の山林にカタクリの自生が見られた。スギ植栽林の林床や沢沿いの林道にカタクリが群生していて春にはひっそりと咲く紫色の花を観察できたが、道路工事や樹木の成長によって光線が入らなくなったせいか、今では見られなくなってしまった。

ナンバンギセル

構造改善事業で田の区画整理をする以前に飯島町でナンバンギセルを見つけた。ススキの根元に生えているうすいピンクの植物はとても珍しかった。残念ながら大きな土木事業によって生えていたあたりは大きく変わってしまった。

ヒカリゴケ

飯島町の我が家の裏にあった古い石垣の隙間には光前寺と同じようにヒカリゴケがあり、小学生の頃にはよく眺めていた。地域全体の田んぼの区画整理で石垣も取り払われヒカリゴケはなくなってしまった。

その他畦畔の植物

キスゲ、カワラマツバ、リュウノヒゲ、ツルボ等、かつての田の土手に生えていた多様な植物が40年ほど前に土手の工事でなくなってしまっている。

(星 野 政 寛)